

---

## 溝口博史\*

聞き手 小川浩一

---

### 創業以来の地方民放の気概

—今日は宜しくお願ひします。初めに北海道放送の創業時からの特徴である「フロンティア・スピリット」が現れた具体的事例を1、2お教え願えますか。

溝口 HBC（北海道放送）は北海道の歴史上「フロンティア・スピリット」は当たり前のことで、開拓したうえで更に進むべき方向として「地域に根ざし世界に羽ばたく」をモットーにしています。それが具体的に表れた例として、草創期の技術に関する話をしましょう。ひとつは、まだラジオしか放送していなかった時代の昭和29年8月のことです。「北洋漁業再開記念北海道博覧会」ご視察のため青函連絡船で函館に上陸される天皇皇后両陛下をテレビで生中継しました。これが北海道で初めてのテレビ放送実験です。その後も札幌で実験放送を重ね、雪国でテレビ放送が可能かどうかを検証する日本初の「雪上電波伝搬実験」も行っています。ここからが凄いんですが、一連の実験で使った機器と技術力は昭和31年10月に海を渡り、北京で開かれた「北京日本商品見本展示会」に出品されました。派遣された技術マンはHBCから4人、ラジオ東京（現TBS）から2人。日本製のカメラを使って撮影した舞台劇などの映像が、北京市内50カ所に設置した受像機に映し出されました。これは中国で初めてのテレビ放送です。放送は3週間にわたって行われ、毛沢東主席も周恩来首相もカメラの前に立ったと伝えられています。ほとんど知られていませんが、中国初のテレビ放送はHBCが行ったのです。しかも、北海道で本放送をスタートさせる半年前。放送開始前から世界に羽ばたいていたという事例です。

もうひとつ挙げると、HBCはテレビ送信所をNHKの反対を押し切って手稲山の頂上に設置しました。NHKは大通公園のテレビ塔建設を主張しましたが、広い北海道で可能な限り遠くまで電波を飛ばすには山の上に送信所を置くことが合理的でした。頂上までの道路はHBCが単独で開発しました。山岳を切り拓いた難工事の記録がフィルムに残されています。放送開始はNHKより3か月余り遅れてしまいましたが、受信可能世帯はHBCが圧倒的に多く、手稲山のマウンテントップ方式として、その後に開局する全国の放送局に影響を与えました。今日ではNHKも含め北海道のすべてのテレビ局が送信所を手稲山に建てています。ついでに言うと、HBCテレビのチャンネルが1番である理由は、GHQが使用していたチャンネル1と2が開放されそうだという情報を秘かに入手し、チャンネル3を希望したNHKをよそ目に、チャンネル1獲得作戦を展開していたからです。全国ではNHK（総合放送）のチャンネル1が一般的ですが、HBCは地方民放で数少ないチャンネル1を誇っています。

---

\*みぞぐち ひろし 北海道放送株式会社 常務取締役

初代社長の阿部謙夫は北海道新聞の社長だった人ですが、阿部は「放送はいわゆる文化事業であり、利潤追求の対象には適していない」と述べています。利潤追求のために放送するのではなく文化を創造するために放送する。しかも、チャンネル1番の誇りを持って先頭に立ってやっています。この精神は、放送人の覚悟、放送の矜持として、現在の世代まで脈々と受け継がれていると思います。HBCの体質とも言えます。近年の例で言えば、デジタル時代を迎えてワンセグ独立放送を全国で初めて実施したのは当社でした。HBCカップジャンプをより面白く見てもらうため国内唯一のノックアウト方式と優勝賞金を導入したり、ローカル放送している食育番組「森崎博之のめぐり王国北海道」を東南アジア各国でレギュラー放送化したのも、創業当時の進取の精神の表れです。大阪のローカル情報ワイド番組「ちちんぷいぷい」を2014年秋からあえて北海道で放送しているのも、新しいことへの挑戦、実験好きなHBCらしさと言えます。東京の視点、大阪の視点、そして地元北海道の視点が、月曜から金曜までの午後帯で絡み合う新しい編成です。——テレビ放送を開始した民放としては5番目ですが、この根底にあるのは資本力でしょうか。立ち上げ時にはどんな状況だったのでしょうか？

溝口 HBCはラジオから始まりました。ラジオは全国7番目でした。資本と言っても個人株主が多かったんです。最大で3681人の株主を数えました。札幌の狸小路や小樽の商店街を1軒1軒まわって少額の株主になってもらいました。民間放送ということがよくわからなかった時代です。民放ラジオ始めるといっても、街中のスピーカーから聞こえる街頭宣伝のような理解のされ方をしたようです。北海道新聞社という地元有力紙が核ではありましたが、いくつかの地元企業以外は大きな資本は入ってこず、地域に暮らす大勢の個人株主によって設立された放送局でした。その生い立ちを見る限り、地域住民に支えられ、期待され、応援されるメディアだったと言えます。——日本のテレビの創生期を見ると、日本テレビ、TBS、それからABCにCBC、それでこれHBCとってくる。やはり、資本力が強いからと云っても、あるいは株主がたくさんいたとしても、やろうという意欲があっただけでは内容が充実した放送ができませんね。そう考えるとすると、今挙げた他の局みんないちおう資本力がある。HBCだって基本的には資本力があるから、この裏づけの下に意欲があっただけじゃなくかと思っています。そして、その力が今でも続いているんじゃないかと思うんですけども。単に創業者の阿部謙夫社長のテレビ放送に対する想いだけではできないのではありませんか。

溝口 豊かだった時代もあったかも知れないですけど、デジタル化で苦労したここ10数年は非常に厳しい経営の会社です。

——そのわりにいろんなことをなさっているじゃないですか。

溝口 新しいことに挑戦する面白さは何ものにも代えがたい。使っちゃうんですかね、お金を。そして、貧乏から抜け出せない(笑)。ついこの間まではデジタル化の巨額投資で赤字でしたし。社屋建替えの時期も迫っています。まあ、気持ちだけは強くあるというか、今の若い人たちにも、何か新しいことをやりたい、作りたい、その気持ちを伝えていきたいと思っています。例えば、テレビが輝き始めた60年代のことですが、安岡章太郎といった、それまでテレビドラマを書いたことのない小説家に、テレビって面白いと思わせて書下ろし脚本を書かせてしまうHBCのプロデューサーの力はすごいと思うんです。当時はテレビもニューメディアだったので、若き創作者にはテレビが魅力的存在だったのですが、多くの作家がHBCと関わっているんです。ラジオやテレビの昔のドラマ脚本を調べてみると、安岡章太郎、安部公房、寺山修司、谷川俊太郎、山川方

夫、この間亡くなった渡辺淳一など、後に大家と呼ばれる作家が脚本家として名を連ねています。小説家や詩人が自分でオリジナルの脚本を書いていたんです。谷川俊太郎が書いたのはアイヌ民族をテーマにした『ムックリを吹く女』（1961年「東芝日曜劇場」）。安部公房が書いたのは、昆虫好きな農家の女の子が畑の農薬散布に反対する『虫は死ね』（1963年「東芝日曜劇場」）。作家もプロデューサーもディレクターも若くて、ここはこういう演出のほうがいいとか丁々発止でやっていたわけですよ。渡辺淳一は札幌医大の医学生だった頃からHBCに出入りしてラジオやテレビの脚本を書いています。ラジオの朝番組ではパーソナリティーまでやっているんですよ。そうやって番組を制作してきた草創期のエネルギーは、今、残念ながらちょっと失われているかも知れません。地方局だけでなく、キー局でも。

HBCがテレビドラマをレギュラーで制作しなくなった経緯については、前号の「ジャーナリズム&メディア」第7号（2014年3月20日刊）の特集「テレビ60年 地域と民放」に書いた「地域に根ざし世界にはばたく」を参照願いたいのですが、制作費が保証される全国ネットの枠が無くなったことが背景にあります。

民放の数が少なかった時代には、渋谷公会堂の「美空ひばりショー」をHBCが制作して全国放送したこともあったと聞いています。おそらく東京の放送局も人員不足やなんやかんやで放送時間を全部埋めるだけの制作力が無かったんだと思います。やがて制作プロダクションが生まれると、キー局はプロダクションに番組をアウトソーシングします。視聴率やキャスティング力を考えると、地方局よりプロダクションのほうが安くて質の高い番組ができると踏んだのでしょう。地方局の全国放送の枠が減り、テレビ番組の東京一極集中化が進みます。

### ニュースを捉える眼

溝口 だいぶ前の話になりますが、2004年にイラクで日本人3人が武装勢力に誘拐される事件がありました。3人のうち2人が北海道出身者でした。この2人についてHBCは誘拐事件が起きる前に取材をして話を聞いていました。2人とも事前取材していたのは全国のメディアでHBCだけだったと記憶しています。イラク復興支援特別措置法が成立した時に、北海道からの自衛隊派遣の問題もありましたので、自衛隊員やその家族の取材とか、特措法に賛成か反対かなどについて、いろんな特集企画をローカルニュースで放送しました。その中に、劣化ウラン弾について研究発表をした高校生と、イラクでボランティア活動している女性が登場していて、この2人が誘拐されたのです。事件が発生すると、北海道では新聞もテレビも2人の人となり取材するため本人不在の実家に押しかけ、家族のインタビュー取材をめぐる大騒ぎになりました。その上、日本政府が誘拐は3人の自己責任だという冷たい発言をして、混乱に拍車がかかりました。

——その発言は非常に鮮明に記憶しています。

溝口 嫌な言葉でした。私たちのニュース系列であるJNNは、HBCのニュースライブラリーを使って、2人の考え方や人となりを伝えることができました。地方局の日常の取材がいかに重要かということを物語る事例です。その当時、TBSの金平茂紀記者がワシントン特派員でした。彼がパウエル国務長官にインタビューして、パウエル長官が「彼らのことを深く心配する義務を負っている。彼らは私たちの友人であり、隣人であり、米国の仲間の市民なのだ」と明確に発言したことから、日本では2人あるいは家族に対するバッシングがピタリと止まりました。地方の記者も海外

特派員も一体となってひとつのニュースを作り上げていることがお分かりいただけると思います。——ちょっと伺いたいのですが、イラクに行った3人のうち2人が北海道出身ということですが、どういっ  
きっかけて彼らの活動を事前にHBCの記者の方は気づいたのでしょうか。

溝口 イラク特措法が成立した時(2003年7月成立)に、ただ成立しましたという国会からの報道ではなくて、実際に活動に参加する自衛隊員はどういう気持ちなのか、その家族はどう感じ何を考  
えているのかといった点を掘り下げ、いろんな角度から企画をたててローカルニュースで放送しました。イラク特措法はHBCの放送エリアに関わる重要なニュースだったのです。東京キー局に任せておけません。誘拐された男性に関しては、彼がまだ高校生の時ですが、イラクに関連して劣化ウラン弾の研究発表を授業でやるということを知りつけて取材に行きました。女性に関しては、一時帰国しているというのでイラクの現状やボランティアの内容を聞くためインタビューに行きました。たまたまと言えはたまたまですけれど、HBCの事前取材映像はキー局を通じて世界に発信されたので、もしかすると誘拐事件の犯人とかイラク側の人たちが見た可能性もあります。2人がスパイでもなんでもないと  
いう普段の人間像がイラク側に伝わって解放されたとすれば、命に関わる重要な取材をしていたことになりま  
す。

——それも、創立以来の会社の考え方、地域に根ざし世界に羽ばたく、つまり、地域で集めてきた情報を世界に発信したということですね。

溝口 だから、やれ火事だ、やれ交通事故だということだけでローカルニュースを制作しているのではなく、地域でどんな人が、どんなことに、どんな想いで取り組んでいるのか、どういう生き様の人が暮らしているのか、喜び、苦しみ、悲しみ、そういうものを日常的に取材していることによっ  
て、それが、ある時は映画製作など文化創造につながることもあるし(「ジャーナリズム&メディア」第7号に、ニュースからドキュメンタリー番組が生まれ、それが書籍になり、映画化され、CDやDVDにもなった「記憶障害の花嫁」について記述しました)、ある時は海外で人質にされた人の命に関わることもあるというわけです。

——確かに発生モノを追うだけという意味ではないという点でも、地域とのつながり意識の覚醒という点でも非常に有意義な活動だと思いますが、そうした要請は現場の記者の人には仕事の負担がかかりませんか。

溝口 そんなことはないと思います。火事や交通事故にも何が隠されているか分かりません。だから取材するんです。それが私たちの仕事ですから。地方の記者は、私もこれ、遠近両用の眼鏡をかけていますが、自分のエリアの近間のものを見る目と、東京とか大阪とかあるいはもっと遠い海外を見る目と、両方持つことができます。札幌の住宅街にクマが出たというニュースと、イラク特措法が成立したというニュースを、同じ記者が同じレベルで取材できるのが地方局の良いところです。地域に暮らす人々の生の声を聞きながらジャーナリズムの一端に関われることは、大きな喜びです。

——その点は、ジャーナリストのあり方の話に関わってきますね。

溝口 地方民放の記者だからこそ、常に大きな視野で世界を見ていなくちゃいけないんだと思います。地域住民のために。

——会社として、基本的な記者教育というんでしょうか、あるいはジャーナリスト教育というのは、今おっしゃったような視点あるいは取材のあり方、姿勢でしょうか、そういうのは常に自社内でのジャーナリスト教育のレッスンを通じて脈々として受け継がれているのか、それとも放置していても自然と受け継がれるもので

しょうか。

溝口 特にレッスンはしてないですけども、放置していて受け継がれる時代でもなくなってきましたね。普段、どういうふうにもニュースを取材し、成果物をどう放送しているのかを先輩に教えてもらいながら身につけてくるんだと思います。私は若い記者時代、泊勤務をひとりでやっている会社責任とか報道部の責任をひとりで背負っているような気持ちになって、ガクガク震えるような緊張感を覚えました。世の中で今、何が起きているのか、それが北海道にどう関わってくるのか、ひとりしかいない泊勤務で何が起きてもそんな原稿が書ける記者になりたいと思っていました。それはニュースだけでなく、ドキュメンタリー制作でも同じことが言えます。私も若いころには多くのドキュメンタリーを作ってきました。広く世界を見ることの一例を挙げましょう。

1991年の湾岸戦争の時に、バグダッドの空爆の映像がテレビで繰り返し放送されました。闇の中にパッと光るのを見ながら「アラビアンナイト」の世界はどうなるのだろうかと考えました。東京にいたらそうは思わなかったかも知れませんが、札幌で空爆映像を見ると何故か「アラビアンナイト」が重なりました。母が語る「船乗りシンドバッド」を聞きながら寝入ったバグダッドの子どもは、多国籍軍の空爆にどんな顔をして飛び起きるんだろうと思うと、バグダッドに行きたくてしょうがなくなるわけです。特派員として行くにはJNNや社内の手続きも面倒で時間がかかります。それならドキュメンタリー番組を企画してディレクターとして取材に行こうと考えました。実現したのは、翌年の休戦状態に入った時でしたが、それでも日本大使館が引き揚げたままになっていて、バグダッドには私たちのクルー3人しか日本人がいませんでした。取材でも怖い思いを何度かしましたが、まさに自己責任です。

この企画は、戦争や民族紛争は相手の文化を知らないことから起きるのではないかとの仮説を世界の紛争地を巡って取材するものでした。多国籍軍はバグダッドに大量のミサイルを打ち込みましたが、彼らはバグダッドのことをどれだけ知っているのかと私は疑問を感じていました。隣の国にはどんな文化があるのか、砂漠の向こうではどんな歌が口ずさまれているのか、子どもの頃からバグダッドの歌を一曲でも知っていれば、いきなりミサイルを撃ち込むことはしないと思います。これは「夢見るころに教わりし歌～世界の子供たちは何を歌っているか～」というドキュメンタリーになりました。欧米、ロシア、アフリカ、中東、東南アジア、中国…。世界の小学校をまわって音楽の教科書を徹底的に取材しました。日本は明治になって西洋音楽を一気に取り入れたので、外国曲が比較的多い教科書になっています。しかし、アメリカの子どもたちはロシア民謡を歌ったことがないし、ロシアの子どもたちは「峠のわが家」を知りません。取材当時、ちょうどチェコとスロバキアが分裂騒ぎを起こしていたんですが、双方の小学校を訪ねてみると、チェコとスロバキアでは別々の教科書を使っていました。プラハとブラチスラバで音楽の専門家に話を聞くと、お互いに批判するんです、相手の歌を。これなら分裂してしまうなと思いました。

こういう取材のなかでイラクに入っていったんですが、音楽の教科書は表紙をめくると戦闘服姿のフセイン大統領の写真。他国の歌など一曲もありません。それでも、ビルの瓦礫が無残なバグダッドの片隅に「アリババと40人の盗賊」のモニュメントが無傷で残っているのを発見した時は胸が熱くなりました。番組では、「子どもたちに他国や異民族の歌を積極的に教えよう。それが世界の平和につながる」と主張しました。

——このドキュメンタリーは全国放送ですか。

溝口 湾岸戦争のニュース映像を見ながら札幌で企画したドキュメンタリーが全国放送になりました。もしかしたら、札幌で見ていたからそういうイメージが湧いてきたのかも知れません。これ、東京で記者活動やっていると、湾岸戦争本体に飲み込まれた企画になると思います。札幌だとちょっと引いた目で見てるので「アラビアンナイトはどうなった？」という発想になる。つまり、対象との向き合い方が違うのでしょう。ましてや湾岸戦争の渦中にイラク周辺で取材していた記者は、そんなことに頭は回しません。でも、札幌で、たいへん申し訳ないのですが、爆弾が飛んでこないところで見ていると派生的な発想が生まれるのでしょうか。そういうことであれば、地方記者や地方民放の存在は意義深いということですね。手前味噌すぎるかな（笑）。

——それは、中国放送元社長の金井宏一郎さんが「ジャーナリズム&メディア」第7号でおっしゃっている「情報の地方分権」という趣旨とは少し違うけど、やはり地方の主権、情報主権、地方の民放局が、地方にあるがゆえのジャーナリズム性というのは、むしろそこで発揮し得るものだということではないでしょうか。

溝口 地方にいることの有利さを積極的に見つけようということですかね。全国各地に放送局があり、東京と違う空気を吸っている記者やディレクターがいる。だったら、東京とは異なる視座のニュースや企画を出して行こうということなんです。言論の多様性の観点から見ても、地方のジャーナリズムが重要な役割を担っていると思いますね。新入社員にはよく話しますが、北海道で暮らしていると日本列島の動きがよく見える…、ような気がする。足元に大きな日本地図のパネルを敷いて、北海道の上に立って南を眺めると、東京も大阪も、はるか沖縄までよく見えます。桜前線が北上してくるのも見えます。台風も北上してきます。毎年のことなのにどうして台風被害が起きるんだろうと考えたりします。様々な出来事や情報が北海道から俯瞰できます。北海道は世の中の動きを冷静に分析できる比類なきエリアではないかと魔法をかけて、新入社員に幅広い視野を持つよう話しています。

——地方紙、地方新聞のジャーナリズムとは異なるのでしょうか。

溝口 各地に歴史のある大きなブロック紙や地方紙がたくさんありますが、新聞は情報がそのエリア内で止まってしまっているというか、情報をエリア内でまわして終わっているように思います。他方、地方民放の場合はエリアで取材したニュースをローカルニュースとして放送するだけでなく、時として全国発信しています。これが放送と新聞の大きな違いじゃないかなと思います。私たちJNNのニュース系列はTBSなど全国の民放テレビ28社で構成していますが、HBCは北海道からどのくらいの数の全国ニュースを発信しているかという、定時ニュース番組に限っただけでも1ヵ月に平均50本を超えます。長期にわたる大きなニュースが起きると、例えば先年の豊浜トンネル崩落事故とか有珠山の噴火などがあるともものすごい数になります。50本というのは平時の数字です。TBSを除く加盟27社で全国発信のニュースが一番多いのは大阪のMBS（毎日放送）ですが、その次に多いのがHBCなんです。北海道は全国発信されるニュースが多い稀有な地域と言えます。ヨーロッパで言えばデンマークと同じぐらいの面積、オーストリアと同じぐらいの人口ということで、一国なみの人間生活と社会行動が展開されているので、それだけニュースも発生するということになります。また、季節感なども特異な地域なので、札幌で初雪が降りましたとなると、初雪の映像がニュース番組以外にも情報ワイド番組で使われたり、天気予報番組に使われたりと、各番組で1日中使われます。そういう数も含めてカウントすると情報の発信量は膨大になります。メディアを比較すると分かるんですが、これはテレビ特有の実態です。新聞の全国紙を

東京で読んでいても北海道の話題が目につくことは滅多にありません。テレビニュースは大阪・北海道を先頭に地方からの情報発信量が極めて多いメディアなんです。ネットワークに加盟している地方のテレビ局がもっともっと多様な目線のニュースを発信していけば、日本はより豊かな情報社会を構築していけると思いますよ。

これは金井さんがおっしゃっていることとは遠いでしょうが、情報の地方分権ということ言えば、私はそれほど悲観的には思っていません。確かに、全国ニュースの場合、ニュースの編集権はキー局にあります。JNNではTBSです。伝えるべきニュースの選択、放送分量、放送順などを決めていくのはTBSのデスクです。しかし、地方局から全国発信するニュースの内容は当該局に任せられています。北海道から上る（全国発信する）ニュースはHBCが取材・構成し、あわせて全責任をHBCが負います。原稿、インタビュー、映像表現、すべて発局責任になっているのがJNNの良いところです。書いたことへの責任もありますし、書かなかったこと（特オチ）への責任も問われます。そして、キー局から「こう書け」と言われたことは一度もありません。地域に根ざし、地域に這いつくばって取材活動している地方民放の意地と誇りがネットワークニュースの仕組みを維持してきたのだと思います。JNNの報道に関する限り、草創期から一貫して地方分権の意識が強く反映しているのではないのでしょうか。

付け加えたいのは、地方民放が自社制作番組のなかで独自に全国ニュースを扱うケースが増えている事実です。ローカル番組でやる全国ニュースです。地方局が夕方6時以降に30分程度のローカルワイドニュース番組を編成し始めたのは1970年代から80年代にかけてでした。2000年代に入ると午後4時以降に放送するローカル情報ワイド番組が生まれてきます。長時間の情報ワイドの中にはニュース枠も置かれ、地方局のアナウンサーやキャスターが永田町から海外までの幅広いニュースを取り扱うようになります。地方ジャーナリズムの歴史を考えたとき、ローカルテレビ番組における全国ニュースの放送展開は過去になかった画期的な変化です。東京キー局と同じ映像素材を使って、東京とは違う地域独自の目線でニュースを論評することができるようになったのです。これはまさに情報の地方分権です。例えば、この間の安倍総理と習近平主席との笑顔のない握手、あの気持ちの悪い握手の映像素材は、TBSだけでなく、HBCにも静岡放送にも山陽放送にも熊本放送にも系列各社みんなのところに行くわけです。これまでだと全国ニュースの定時番組で放送したらおしまいだったニュースが、地方の情報ワイド番組で繰り返し放送されます。しかも、自社のアナウンサーや地元のコメンテーターが「この握手はああだよ、こうだよ」と語ります。地方民放局は地方のまな板の上で国際ニュースをも転がせる時代になったのです。そういう意味で情報の地方分権は確実に進んできているという印象を私は持っています。

——今おっしゃったのは、いちおう東京から下ってきた素材があったら、その素材をそこまで受け止めるけれども、その先になると、今度は自分達の地平の中で処理するということですね？　ところで、それをもう1回上げるといえることはないですか。

溝口 それはあります。例えば兵庫の野々村議員の号泣会見が全国ニュースで放送されると、系列の地方局にも号泣会見の映像素材が渡ります。そうすると、HBCでいえば道議会の政務活動費ってどうなんだろう、札幌市議会はどうなんだろうという切り口で調査取材が始まります。兵庫の号泣会見をきっかけに各地の放送局が政務活動費に関わる企画をたてます。隠れていた事実が取材で炙り出されれば、それは逆流して全国放送になることも当然あります。政務活動費より号泣を

テーマにした企画の方が面白いかも知れませんが。

——地方分権が進むと同時に、場合によっては、地方がもう1回共通素材をそれぞれのところで処理した内容をもう1回共有するという事態が起きてくるということですね。

溝口 そうですね。ちょっと面白い試みをHBCはこの秋改編で始めたばかりです。月～金の午後帯なんですが、正午から2時間はTBSの情報番組「ひるおび!」を放送しています。続く2時間を、これは本当に画期的なことなんですけど、大阪のMBSがローカル放送している情報番組「ちちんぷいぷい」を生で受けて北海道で放送しているんです。「ちちんぷいぷい」は本来もっと長い4時間の番組なんですけれど、北海道では夕方までの2時間分、全体の半分を放送しています。それが終わると、午後4時頃からの3時間はHBCの自社制作ローカル情報番組「今日ドキッ!」を放送しています。これでHBCの午後帯は3番組あわせて7時間の生放送です。この間にニュース枠が何度かありますが、東京目線、関西目線、地元北海道目線と7時間の視座が3つに分かれているので、同じニュース素材を使っても伝え方や切り口が違ってきます。言論の多様性や多元性を意識しつつ、東京・大阪に対峙する北海道の個性や文化を育むことにもなり、極めて意味のある新しい時代のテレビ編成ではないかと、私は大いに期待しています。「ちちんぷいぷい」を放送している枠は、それまでドラマの再放送枠でした。2時間の生放送にしたほうが突発事件が起きたときにすぐ報道できるということも編成改革の理由でした。

——それは非常に面白い試みですけど地元は大変じゃないですか。

溝口 MBSに頑張ってもらって、おおきにありがとさん、です。まだ、始めたばかりですが、あえて北海道ネタを企画してもらうより、コテコテの関西文化を展開してもらったほうが北海道の視聴者の受けは良いようです。つまり、視聴者は視座の違うものを求めているのだと思います。北前船が運んだ文化の復活でしょうか。

### ドキュメンタリーの全国放送

——先ほど、バグダッドの空爆から生まれたドキュメンタリーのお話がありましたが、ここからは溝口さんが作られた作品を例にドキュメンタリーについて話していただけますか。

溝口 ドキュメンタリーは、カネもヒトもジカンもバシヨも大掛かりになるドラマと違って、地方民放局が自社制作しやすいコンテンツです。かつまたニュースと同じように、放送局にとって存在意義を問われるほど重要なコンテンツであり、視聴者からも地域からも制作を期待されているテレビ番組です。私は現場の記者・ディレクターを26年やりましたが、同僚のなかではドキュメンタリーをたくさん制作したほうだと思います。いろいろなテーマのドキュメンタリーを作りましたが、基本は誰が見ても理解できる普遍性のある作品です。地方局だからといって、エリアの中だけでやっても広がりがないので、テーマによっては取材の足を海外まで伸ばしました。取材で訪ねた国は30か国くらいになるでしょうか。ただ、北海道が出てこないドキュメンタリーは1本もありません。「過ぎし日のブラームス～没後100年に聴く幻のピアノ録音～」なんて、タイトルを見ても北海道のほの字も想像できませんが、晩年のブラームスとその作品に新しい解釈を提供したドキュメンタリーでして、その鍵となるエジソン発明の蓄音機に録音されたブラームス自身のピアノ演奏を新たに再生するのが、北海道大学電子科学研究所の光学技術だったのです。

——地方制作のドラマの放送枠が無くなった話がありましたが、ドキュメンタリーは全国放送されるんですか。



溝口 自分がディレクターとして作ったドキュメンタリーで全国ネットされたものは17本あります。ローカル放送のドキュメンタリーも同じくらい制作していますが、そのなかには番組コンクールで受賞したため番販で全国をまわった作品もあります。いずれにしても、北海道の放送局が生み出す放送文化を、地元はもちろん全国の人々に見てもらいたくて取り組んできました。地方民放のディレクターとしては全国ネット17本は多いほうだと思いますが、その形態というか仕組みは様々なので、そこから話したいと思います。

例えば、ゲーテの詩「野ばら」に154曲の異なるメロディーがあるという音楽史を掘り起こす「童は見たり～世界最大のヒット曲『野ばら』の謎を追う～」や、先ほど話した「夢見るころに教わりし歌～世界の子供たちは何を歌っているか～」などは、日曜午後2時頃の放送枠をTBSから全国ネット用にもらってオンエアしたケースです。そのかわり、その放送枠のセールスはHBCの営業部が責任を持ちます。こういう放送では企画が勝負です。TBSの編成局を唸らせる。広告代理店を納得させる。スポンサーを探すHBC営業部を安心させる。そんな企画書が必要になります。並べて振り返ってみると、これらにも北海道のほの字が出てきませんね。特に意識したわけではないですが、必ずしも北海道を売り物にした企画ではないということです。

北海道らしい番組もあるんですよ。「サラダ記念日」で話題になった俵万智さんが高校教師を辞めて歌人として生きていくという時に、雑音のない大雪山に来ませんかと手紙を書いて大雪山縦走5泊6日のドキュメンタリーを制作しました。「風吹くままに～俵万智の大雪山歌紀行～」です。日曜午後の枠がすぐ取れました。時の人、俵万智さんが大雪山のお花畑を見ながら歌を詠んで登山します。誰よりも私が俵さんと仕事がしてみたかったのです。あの斬新な短歌が生まれる瞬間を見てみたいというのが本音です。ディレクターにそういう思いがあると、企画書がどうのこうのと言う前にワーッとやれるのがテレビの不思議さです。歌える短歌にしようと思いつき、林光さんに素晴らしいメロディーもつけてもらいました。テレビ草創期に多くの小説家や詩人が番組制作に関わったという話を冒頭にしましたが、先輩ディレクターたちにも「安部公房とドラマを作りたい」という強い気持ちがあったんだと思うんですよ。自分もそうだし、後輩たちにも、好きな人、気になる人、優れた人と仕事をするように言っています。時代は移り変わってもテレビの番組制作ってそういうものだと思っています。

——その気持ちってどこから出ていらっしゃるんですか。地方にいるということと、なんか関わるのでしょうか。それともそうではなくて、番組制作者あるいは少なくともテレビの人間としてこういうものをつくりたいという意欲は誰でも同じだというふうに考えますか。言い換えると、札幌なり北海道にいるからなのでしょうか。

溝口 やっぱり自分の興味ですね。この人と話をしてみたい、この人と仕事をしてみたいという気持ちは、東京で暮らしていようが北海道の田舎にいようが、ニューヨークで特派員をやっているやうが変わらないんじゃないですか。そういう気持ちがない人はテレビで生きていくのは無理です。もうひとつは、自分と違う目線でこの北海道と関わってもらいたいということでしょうか。

——この人と仕事というときに、北海道がどこかで結びついてくるのですね。

溝口 それは地方民放局を根城とするディレクターである以上、当然のことではないでしょうか。東京大学の広大な演習林が富良野にあって、なかなかユニークな森づくりをしています。どろ亀さんという愛称で知られる高橋延清名誉教授、この方は本郷の教壇に一度も立ったことのない現

場主義の研究者だったのですが、どろ亀さんの森づくりを、これまた日曜午後の全国ネット「日本で一番美しい森～富良野から地球を救おう～」というドキュメンタリーにまとめました。このときは、森の小説をたくさん書いているノーベル賞作家の大江健三郎さんに富良野まで来てもらいました。また、毎日のように将棋盤の木目を見つめ木の駒に触れている羽生善治さんにもその原木を見に森の中に入ってもらいました。千住真理子さんにはバイオリンの素材と同じ樹木の前で演奏してもらいました。やっぱり北海道に来てもらいたい、北海道を見てもらいたいんですね。自分が地元の間人として見ている見方とは違う北海道を私にぶつけてもらいたいという気持ちもあるし、こっちはこっちの思いを伝えたいとも思います。それが、新しい小説に結びついたり、棋戦に反映されたり、バイオリンの音色に表れたりするといいなという思いがあるんですね。その微かな成果がドキュメンタリーを視聴してくれる全国の人々に伝わると嬉しいです。

こうして話していると、北海道に人を連れて来るだけでドキュメンタリーを作っているように思われるかも（笑）、それは違います。

——根底には北海道の目線があり、北海道を描いているんですね。

溝口 そうですね。誰に北海道を見てもらうのか、誰が道民の気づかないことを指摘してくれるのか、ということは重要なことです。北海道では時々、魚が沿岸に大量に打ち上げられる事件があります。温暖化による海水温の変化が原因じゃないかといわれているんですけども、私が現場にいたころにも、サンマが大量に打ち上げられてニュースになったことがあります。HBCの記者はもちろん取材するんですが、なぜかこういうニュースになると興味を持って東京からも記者が来るんですよ。浜辺の住人のなかにはサンマを焼いて試食する人もいて、格好の取材対象になります。東京の記者は、全国ニュース番組のなかでレポートして、焼いたサンマを「美味しい、美味しい」って食うわけです。その全国ニュースに引き続いてローカルニュースが始まり、HBCの記者が同じように食べて「脂が抜けていてまずい」と（笑）。住民にインタビューすると「犬の餌です」（笑）。全国ニュースからローカルニュースまで通して見てくれた視聴者は、美味しいのかまずいのか分からなくなります。

——どっちが正しいのか、やっぱり地元の記者だろうな（笑）。

溝口 東京の記者は「美味しい」と食べたほうがいいと思ったのか、東京の目線で行けばこういうものは「美味しい」に決まっているのか、東京の記者は本当に「美味しい」と感じたのか、よく分かりませんが。北海道を誰に見てもらうかで大きな違いが生まれます。

——それは一言でいうと、たぶんひとつは目線だし、その目線を支えている感性の違いみたいなものということでしょうか。

溝口 放送が終わってから、けっこう議論しました、キー局の編集長やデスクと。一体どうすべきなのかと、こういう場合。

——流しちゃったんでしょう、もう（笑）。たぶん、食べてレポートした東京の記者は随分凹んだじゃないですか。

溝口 現場では打ち合わせも何もしていないんです。知床といっても広いんで、記者どうしは現地で会っていないんです。同じニュース番組のなかでサンマを「美味しい」とも「まずい」とも言う。発局責任で成立しているJNNニュースの醍醐味と言えは醍醐味なんです。

### 地元へのこだわりと普遍性

溝口 HBCのドキュメンタリーについては、昨年の「ジャーナリズム&メディア」第7号の「テレビ60年 地域と民放」に少し書きましたので、是非、目を通してください。私だけがディレクターではありませんので。多種多様な目線のドキュメンタリーが60年にわたって制作されてきました。

——今、私が唯一頭に浮かべていて、シリーズでズーッときているのは、NNNのドキュメント、あれはどんどんどんどん突拍子もない時間に追い込まれていっているけど、それでも系列局が、みんな頑張ってるってしますよね。ああいうのは、JNNにはないんですか。

溝口 羨ましいですね。昔はあったんですTBS系列にも。タイトルは「カメラルポルタージュ」。30分番組でした。それから番組名が変わって、私が入社した1975年頃は「テレビルポルタージュ」でした。その頃、有珠山が噴火しまして、その時に先輩たちと一緒に「本当に有珠は怒ったのか～噴火2週間の洞爺湖畔～」を「テレビルポルタージュ」で放送しました。私にとって入社して初めて担当したドキュメンタリーでした。

そのうち、映像に音声と同時に録音できる簡易なハンディカメラが普及し、現場を舐めるようにしてフィルムにおさめる貪欲な撮影に重きを置いたドキュメンタリーが流行しました。カメラをシュートしたひとコマ目も捨てないという精神から、編集のつなぎ目からカメラのシュート音やフィルムが回る音がビューン、ビューンと聞こえるようなドキュメンタリーでした。プロデューサーは報道のお春と呼ばれたTBSの吉永春子さん。HBCからも「テレビルポルタージュ」でいくつものドキュメンタリーが全国放送されました。そのなかに1973年放送の「新幹線の通りみち」があります。北海道内の新幹線ルート決定フィーバーを取材したドキュメンタリーですが、放送から40年以上が過ぎてようやく北海道新幹線が現実味を帯びてきたことに感慨深いものがあります。

「テレビルポルタージュ」は、映像がENGのビデオになってきた1978年に「土曜どきゅめんと」に変わります。フィルムと違ってカメラから発せられる雑音はなくなり、映像も鮮明で、ENG取材はドキュメンタリーにテレビドラマのような映像質感を持ち込みました。番組コンセプトとして「ナレーションなし」が打ち出され、映像と音だけでリアルな取材現場を表現することが求められました。ここで私は、「知床・通院300キロ～北の家族の一週間～」というドキュメンタリーを作りました。知床に小さなレコード屋さんがあって、そこのお母さんは人工透析が必要な人でした。当時、人工透析ができる病院は150キロ離れた釧路にしかなかったので、彼女は週3回、路線バスを乗り継いで釧路まで通っていました。1往復300キロです。冬の猛吹雪の日は道路が通行止めになりバスが運休します。バスが止まると命に関わるので、天気予報を注意深く見ていて、前日に出かけることもあります。帰宅できない日もあります。そのため釧路に小さなアパートを借りています。自宅にはお母さんを暖かく見守る小学生の姉弟がいて、お父さんと一緒に健気に家事を手伝います。そんな家族の一週間をノーナレーションで描き、医療過疎の現実を浮き彫りにしました。

この「土曜どきゅめんと」が1時間番組に拡大して、今の「報道特集」になっていきます。「報道特集」だとキャスターニュースのような感じになって、ドキュメンタリー番組という印象はなくなりました。それでも、30分の半枠とか60分全枠を使ってるドキュメンタリーを放送することができました。私が制作に直接関係したのは、料治直矢さんとか堀宏さん、田畑光永さんがキャス

ターの時代です。「報道特集」では、中川一郎代議士が自殺した時に「中川一郎後継問題・骨肉の争い・長男と秘書の出馬表明」と、日本一といわれる農協の巨大組織を取材した「畑の中のコンビナート・北海道士幌農協」、北海道特有の寄生虫病に迫った「キタキツネが媒介・奇病エキノコックス」、この3本のドキュメンタリーを「報道特集」から全国放送しました。

現在の金平茂紀さんと日下部正樹さんの「報道特集」は放送時間が1時間半に拡大したんですけども、当日のニュースやスポーツニュースが入るようになって、ますますドキュメンタリー番組の色彩が薄れてしまったのが現状だと思います。もちろん、何がドキュメンタリーなのかという議論も必要になりますが。

小川さんのおっしゃった日テレ系の「NNNドキュメント」のような番組を持ちたいという意見は系列内の心ある人のなかにはいまして、深夜ですが「報道の魂」という番組を細々とやっています。深夜が悪いとは言いません。いまやテレビは録画視聴が当たり前ですから、見ていただきたい番組は24時間のどこかで放送できればいいんです。視聴者にとってテレビを見られる時間がその人にとってのゴールデンタイムです。私は深夜でも早朝でもOKです。話は逸れましたが、細々という意味は、「報道の魂」が系列のネット番組ではないからです。番販による購入番組なので、地方局にとって番組への関わり方が希薄になりますね。「NNNドキュメント」もテレ朝系の「テレメンタリー」もそうだと思うのですが、「テレビルポルタージュ」や「土曜どきゅめんと」には、地方局に対して年間1本はやってくださいとか、HBCなら年間3本はできるでしょうというドキュメンタリー制作のノルマがありました。番組制作にノルマという言葉は使いたくありませんが、地方局の記者やディレクターはネタ探しに一生懸命でした。ある程度のノルマがあることによって、取材対象を見つける努力も必要になるし、ニュースを掘り下げる力を鍛えることにもなるし、ライバル心から他社の表現力や構成力を学ぶことにもなって、地方民放局の制作力アップにつながると思います。私たちの系列がそのようなドキュメンタリー枠を持っていないことに忸怩たる思いがあります。

—あの作り方は、ニュース番組がバラエティー番組化してきたからああいうふうにしたんですかね。

溝口 「報道特集」は少なくともバラエティー化はしていないと思います。アメリカの報道番組CBSの「60 Minutes（シックスティーミニッツ）」を範にしたものです。「報道特集」には「報道特集」の良さがあります。でも「土曜どきゅめんと」も残してもらいたかったですね。

—やろうという意欲と人があっても、枠が取れない、カネがない、それ、本当に欲求不満になるでしょうね。

溝口 きょうは、カネの話はほとんどしていませんね（笑）。カネはないけれど地方局制作のドキュメンタリーを全国の人に見てもらいたい、制作費をどうやって工面しようかということになるのですが、私の場合はキー局制作の番組に潜り込ませてもらうことをやってきました。かつて、TBSにドキュメンタリー的な色合いのある「そこが知りたい」と「日立テレビシティ」というふたつの番組がありました。それぞれ週1回放送のプライムタイムの1時間番組です。1回1回の中身は、TBSが自ら局制作するか、プロダクションが作るかなんですが、そこへHBCにも作らせて欲しいと手を挙げるのです。制作費は制作プロダクションがTBSからもらう金額と同額です。つまり、HBCは独立した放送局ではありますが、ここでは制作プロダクションの位置づけでドキュメンタリーを制作するのです。「そこが知りたい」では2本やらせてもらいました。ひとつは、アイヌ民族の儀式を丹念に独占記録した「カムイ・イオマンテ」。伝統儀式を正しく継承するため

実際にヒグマを神送り（殺害）する場面もあり、アイヌの人たちと議論しながら制作したドキュメンタリーです。もうひとつは「厳寒！北の動物園」。北海道には、動物園が、札幌の円山動物園、旭川の旭山動物園、おびひろ動物園、釧路市動物園と4園ありますが、ライオンとかゾウとか、南方に暮らす動物たちは北海道の雪のなかでどうしているのかというドキュメンタリーです。近年、旭山動物園が人気で話題になっていますが、当時は冬期間になると休園したりお客さんが1日数人だったりという動物園がほとんどでした。ライオンは小屋の掃除のため1日1回外に出されるんですが、寒いのが辛いのか、ドアを両手でガンガン叩いて、中に入れろ、早く入れろとやるんです。ゾウも雪の上では足が冷たいらしく足踏みを繰り返します。

「日立テレビシティ」では3本のドキュメンタリーを全国放送しました。網走の能取岬に暮らす親子のキタキツネを2年にわたって追いかけた「キタキツネ・母と娘の物語」。映画「キタキツネ物語」とは違う本当の生態を描こうというプロデューサーの強い意欲で実現しました。プライムタイムの放送なので、地方局制作のドキュメンタリーを全国の大勢の視聴者に見てもらえます。視聴率は東京で12.2%、札幌で19.6%でした。「大草原の少女みゆきちゃん」という知床の牧場でおおらかに育つ少女とその家族を取材したドキュメンタリーも最初は「日立テレビシティ」でした。ヒグマが出没することもある森のけもの道を往復3時間かけて学校に通う小学一年生のみゆきちゃんを、入学式から一学期が終わるまで取材して7月下旬に放送しました。このときに私が学んだのはドキュメンタリーの普遍性です。

取材が終わって編集室に籠ることが多くなるころ、HBC東京支社の編成担当者から決まって電話が入ります。「溝口さん、今度の作品はどんな内容なの?」。TBSの番組ではあっても中身はHBCの制作ですから、視聴率や番組宣伝にHBCも大きく責任を持ちます。彼女は効果的な番組宣伝を企画するために制作者へ電話してくるのです。「往復3時間かけて通学する小学生の話です」と答えると「そんな子、東京にはたくさんいるわよ」と意外な返事でした。「遠い有名私立に無理して通っている子がいるのよ」「森を歩くので父親が入学前に道を教えてくれるんです」「東京だって地下鉄で事故があったら山手線で帰ってくるとか、バスに乗り換えるとか、覚えることがいっぱいよ」。ちょっと変、アレアレ?という感じでした。「クマも出るようなところなんです」「都会が一番怖いのは人間よ」。電話でやりとりしながら、私は北海道の辺鄙な地域で不便な暮らしをしている家族を特殊なものを見るような目で取材していたのではないかと気づき、深く反省しました。そして、家族や親子の有りようは北海道も東京も同じではないかと考え、普遍性という言葉が思い浮かんできました。東京や全国の視聴者が北海道の特殊な家族を覗き見するのではなく、自分や毎日の暮らしと重ねあわせるように見てもらおう。そうすることで生きることへの共感や生活のヒントが生まれるのではないかと思い、予定していた構成原稿を根底から書き直しました。完成したドキュメンタリーでは両親の名前も年齢も経歴も出てきません。「お父ちゃん」「お母ちゃん」と表現するだけです。住所も知床山麓というだけ。牧場の面積や牛の飼育数は、広い、たくさん。視聴者の誰もが「みゆきちゃん」や「お父ちゃん」になれるような表現を工夫しました。突き詰めれば、舞台が北海道でなくても成り立つ家族の物語です。放送後には全国から反響が寄せられました。普遍性の大切さを教えてくれた東京支社の編成担当者に感謝するばかりです。TBSからも「すぐに続編の取材を始めてください」という電話が入りまして、二学期三学期を取材した続編の「厳冬編」を翌年に放送しました。流水の海に落ちたエゾシカの群れを「お父ちゃん」が救助するエピソード

ソードもあって、厳冬編も好評でした。みゆきちゃんシリーズは、「日立テレビシティ」が終了したので、その後は、総集編やさらなる続編を日曜午後帯の放送枠などをもらって3度ほど全国放送しました。北海道の視座にこだわりながら、舞台は北海道でなくても良いなんて、大いなる矛盾ですね（笑）。

こういう全国ネットのスタイルはその後引き継がれています。TBSの「世界遺産」、今は「THE世界遺産」というタイトルですが、この番組で「知床」が何度か放送されていますが、すべてHBCの制作です。厳しい自然が海と山岳に広がり、ヒグマなど危険な野生動物も生息する知床の映像は、東京の取材クルーがスケジュール通りに撮影できるものではありません。知床を庭のようにしている地元の放送局でなければいい映像は撮れないということになり、HBCが担当しました。それこそ知床が庭で、会社にいるより庭に出ているほうが多いというような後輩ディレクターが、これぞ世界遺産と言うべき美しい知床を全国放送しました。

また、別の後輩は、高校中退者や不登校者を全国から受け入れている北海道の私立高校を継続取材していましたが、このドキュメンタリーがTBSの期首特番として午後9時から2時間枠で全国ネットされました。タイトルは、メモを見ないと言えないんですが、「春の大感動スペシャル ヤンキー母校に帰る…超不良が母校の熱血教師に！日本一泣ける卒業式まで…北の大地激動14年と327日完全密着」です。地方局制作のドキュメンタリーが期首特番としてプライムタイムで全国ネットされるのは稀有なことだと思います。視聴率は東京で13.4%、札幌で26.9%と大成功でした。

#### 地方民放の大転換期：ネットワークの変貌と地方民放の生き残り

溝口 大阪のローカル情報番組「ちちんぷいぷい」を北海道で放送する試みは、少し大袈裟に言うところ、テレビのネットワークが変化してきたということです。東京キー局と地方民放を結ぶネットワークはもちろん基本ですが、地方民放と地方民放を結ぶネットワークとしても有効に活用する、その試みが始まったと言えます。地方民放が生き残っていくための模索のひとつです。というのも、多種多様なメディアやテクノロジーの登場で放送ネットワークをめぐる環境が大きく変わり、地方民放局の存在を脅かす時代を迎えているからです。そのひとつが、テレビをインターネットで同時送信する問題です。テレビは、日本列島を電波でつなぐ放送ネットワークがあって初めて全国にあまねく届いていました。放送局どうしを結ぶ基幹ネットワークが電波から光ケーブルに変わっても、或いは末端の受信機がケーブルテレビになっても、地上波テレビの構造は電波を基本とする意味では同じでした。しかし、インターネットを使えば、電波を一度も介さずにテレビを見ることが技術的には可能になります。

——溝口さんがおっしゃっているのは、放送のネットワークが壊れていくような状況が出現しつつあるのではないかということですね。

溝口 技術的には、ということです。テレビはインターネットで見ればよいという時代が来れば電波のネットワークが必要なくなり、送信所などハード面に限れば、地方民放局の存在意義が失われるおそれがあります。東京で制作されるテレビドラマを北海道民がHBCを介さずにインターネットで見るという構図です。こうなってくると、全国放送仲介の見返りとしてキー局が地方局に支払う「広告料の配分」が必要なくなります。BSと同じように地方局は不要になり、地上波のネットワークの仕組みが崩れていく可能性が出てきます。もしそんなことが現実になれば、地方民

放局は困窮し、放送事業の根本的な見直しを迫られることとなります。

もうひとつ、その時にニュースのネットワークがどうなっていくのかという懸念もあります。地上波テレビの構造を支えている放送ネットワークが万が一にも崩れていくようなことになれば、その次にニュースのネットワークも危機に陥り、日本のジャーナリズムにとって大きな不幸が生じます。ニュースのネットワークは、HBCが加盟するJNNが設立第1号ですが、全国各地の民放テレビが協力しあうことで、NHKに負けない全国ニュースを編集して放送できるようになりました。しかし、ニュース報道にはカネがかかります。ニュースで利益を生むことは無理です。カメラ、マイク、録音機、編集機、CG、取材車、中継車、衛星中継車、ヘリコプターと、ニュース1本を放送するのに多くの機材とスタッフが必要です。広大な北海道のニュースを取材するため、HBCは札幌本社と東京支社以外にも北海道内17地域に記者兼カメラマンを配置しています。コストは膨大ですが、これだけの取材網を敷かなければ視聴者の信頼を得る報道ができません。ですから、地方民放局は放送ネットワークによる「広告料の配分」をニュース取材やドキュメンタリー制作、地域の文化活動に充ててきたのです。まさに、初代社長の阿部の精神です。しかし、放送ネットワークがインターネットに取って代わられると、そうしたニュースや放送文化への運用が維持できなくなります。

——それは維持できなくなるだけでなく、それを維持したことによって集められてきた地方のニュースも消えていくのじゃないですか。

溝口 既存のネットワークの扱いを間違えると、地上波からニュースが消えるおそれもあるという懸念です。BSのようにニュースのない放送になってしまう。BSは地方局を持たないので一本一本のニュースを集められません。コメンテーターや専門家をスタジオに集めて議論するニュース解説番組はできても、速報性のある本格的なニュース番組は制作できません。地上波テレビだけが可能な現在の民間放送ニュースを是が非でも守らなければなりません。そういった課題を抱えないNHKはインターネットの活用には迷いがありません。最近NHK自らを「公共メディア」と言い始めました。「公共放送」ではなく「公共メディア」です。電波を使った放送はどこへ行ってしまうのでしょうか。

——その中で、地方民放局はどうやって生き延びていくんですか。

溝口 そこが大変なのです。大きな問題です。ただ、全国ニュース番組を制作できる仕組みというのは、申し上げた通り、地上波にしかないですから、ここは何としても守りきらねばなりません。地方から全国・世界に情報を発信する機能を失ってはなりません。そして、エリア内にあっては、地元局の目線であれば制作できない、住民の生活に寄り添った地域密着番組を放送して、共感と信頼を得ることが大切だと思います。ただ、地方の民放を支えてくれる広告スポンサーというCMが充分なのかどうかの課題はあります。地方の経済力が停滞・疲弊していますので厳しい覚悟も必要です。ですから、そうならないよう、地上波テレビのネットワークを何としても維持する。そのためには、インターネットをどう活用していくか、そのバランスをどう取るのか、熟慮が必要です。VODサービスは放送本体の視聴率に影響を及ぼさないのかどうか、見逃しサービスはどこまで手を広げるのか。今後さまざまな力学も働くと思いますが、地方民放局として注視せざるを得ない状況が続いています。

一方で、地方民放局が今から自社でやるべきことがあります。それは、自社編成力の強化です。

放送にはキー局が編成権を持つネットゾーンと、地方局に編成権があるローカルゾーンがあります。かつて、地方民放は全国ネット番組と全国ネット番組に挟まれた隙間にローカル番組を放送する「隙間産業」と揶揄されたことがありました。最近は全国ネットの番組が少し減ってきて、いわゆるゴールデンタイムにも堂々とローカルゾーンが設定されるようになりました。そこで何を放送するか、それが自社編成力にかかっています。北海道では、札幌に本拠地を置く日本ハムファイターズのプロ野球中継が有力なコンテンツです。HBCは昨年、全部で26試合をローカル放送しましたが、土日のデーゲーム中継、ゴールデンタイムのナイター中継、どちらも平均視聴率は15%を越えました。東京では考えられない高視聴率です。地方には、東京と同じ机上で論じられないコンテンツが存在するわけです。高視聴率だと全国区のスポンサーも関心を示してくれます。そうしたコンテンツをどう見つけるか、どう育てるか、地方局の編成部門は仕事が面白い時代を迎えると思いますよ。

MBSのローカル番組「ちちんぷいぷい」を北海道で放送していることに関連させれば、地方局どうしてコンテンツを交換したり番販したりするケースが今よりずっと増えると思います。その中から全国的に支持される人気番組も生まれてくることでしょう。地方局どうしが連帯し、制作費を分担し、共同で番組を作るケースも増えてくるように思います。東京キー局から放射線上に伸びている地上波のネットワークが、地方と地方を結ぶネットワークとして縦横無尽に活用される時代の到来、これまでもそうした活用例がなかったわけではありませんが、夕張メロンのネットのようにボコボコと生まれて自在に発展していくのではないかと推測しています。あくまでもネットワーク環境の変化に備えるためですが、なにより自社編成力が試されています。

少し話が飛びますが、小川先生はラジコ（radiko）ってご存知ですか。ラジオをインターネットで聴く仕組みです。課金はされますが全国のラジオが聴けます。今までは考えられなかったことですが、HBCラジオを東京の人も九州の人も聴いてくれるんです。HBCラジオはファイターズのほぼ全試合を放送していますから、九州のファイターズファンはラジコを通してHBCラジオの野球中継を楽しんでくれます。これは、地方局のエリアが全国に広がったことを意味します。その昔、深夜に辛うじて聞こえてくるHBCラジオを抱きながら葉書にリクエスト曲を書いた東京の学生時代を思い出します。ラジオはローカル局が全国に情報発信できるメディアに変わったわけで、これはけっこうHBCにとっていいことです。ところが同じことをテレビでやるわけにはいかないのです。ラジオとテレビでは土壌がまったく違います。テレビの場合は、インターネットに放送本体そのものを飲みこまれるようなおそれがあります。

—そうですね。それは別にHBCだけじゃなくて、しかも各地の地方民放だけじゃない、キー局だって同じ状態なわけでしょう。

溝口 ドラマ、エンターテインメント、スポーツと、番組制作の経験と実績が豊富なキー局は、その制作力がある限り大丈夫でしょう。ただ、繰り返しになりますが、ニュースを作れなくなる危機感はあると思います。

—そうするとニュースは誰が作るんですか？ 地方ニュースは誰が集めてくるのですか？

溝口 NHK以外は誰も作れません。誰も集められません。共同通信や時事通信も無理だと思います。電話取材でも原稿が書ける活字ニュースと、現場に行かなければ映像が撮れないテレビニュースでは、組織も体制も異なります。テレビニュースがNHKだけになっていいですか。そん



な恐ろしいことは何としても避けねばなりません。だからこそ、現在の地上波民放テレビのネットワークを維持させることに全力をあげなければならないのです。

——とりわけニュースに関して地域と強く関わってきた民放のニュース制作ができなくなる。ということは、極端ないい方をすると、地方の民放そのものが不要になる——といういい方は失礼ですけど——不要というか、ニュースができないんですから存立できなくなるということですか？

溝口 地上波のネットワークは60年も前の先人がよくぞ考え出したという最強で最良の映像をともなった言論システムです。HBCの昭和30年代のニュース映像を再構成したDVD「懐かしい昭和のワンパク時代」は私が編集しましたが、華やかな石炭産業、伸び行く国鉄ローカル線、夢を運ぶ青函連絡船、フラフープ、だっこちゃん、メンコ遊び…、今や消えてしまった産業や暮らし・風俗が貴重な映像でよみがえります。地域とそこに生きる人々の姿を映像で記録し続けているのは、その地に根を下ろしている放送局以外にありません。地方民放局を不要にはしてはいけません。

——それは、中国放送元社長の金井さんが主張している情報の地方主権という観点から云えば、ジャーナリズムの危機じゃないですか、地方ジャーナリズム、あるいは日本の地域発のニュースというか、言論が無くなる。

溝口 そうですね。特に、ジャーナリズムの目を地方へ行き届かせるには、地方民放の存在は不可欠です。地方民放の生き残りは日本のジャーナリズムを守ることなんです。

——最後に「ジャーナリズム&メディア」第7号で転換期のひとつの象徴として、ニュースの作り方が変化したという指摘がありました。この点についてもう一度教えてください。田英夫、古谷綱正たちの「ニュースコープ」からNHKの磯村尚徳が現れて、ニュースの作り方が大きく変わったという意味を教えてください。

溝口 分かりにくかったですか。申し訳ありません。「JNNニュースコープ」が先鞭をつけた田さんとか古谷さん、入江徳郎さんのニュースは、キャスターニュースと言いまして、アナウンサーでなく報道現場での経験が深いジャーナリストがニュースを伝えるという点で、画期的な変化でした。磯村さんの場合も、キャスターニュースという意味では同じなんですけども、磯村さんがキャスターを担当したNHKの「NC9」からニュースの表現方法が変わってきました。ニュースの伝え方が変わってきたのです。他局のことなので、磯村さん個人の力がそこにどれだけ働いたかは知りません。しかし、ニュースは確実に変わりました。

それまでのテレビニュースは、フィルムで撮った映像があって、それにコメントをつけて伝えるというスタイルに決まっていた。ところが「NC9」では、映像だけでコメントがまったくないニュースがあったり、映像がなくて文字だけのニュースがあったり、現場映像の代わりにイラストの紙芝居で伝えたり、何も動きがないということを生中継でわざわざ見せたり、とにかく、ニュースの表現方法が大きく変貌しました。斬新でした。しかし、言いたかったのは、変貌させたのは確かに「NC9」ですが、そうしたニュース表現の多様化をより多くの視聴者に認識してもらい、より新しい表現に発展させていったのは地方民放局だったということです。第7号で書いたのはそのことです。「NC9」のころ、地方の民放各局で夕方ローカルワイドニュース番組が次々とスタートしました。飛躍的に発展した地方ジャーナリズムを支えた放送記者やディレクターたちが「NC9」に負けない表現改革に挑戦していったのです。「NC9」に反してNHKのローカルニュースは旧態依然でした。ところが民放の地方記者は、それまでの50秒ニュースから抜け出して、映像と音声による表現世界へ踏み込んでいきました。ニュースが多様な視点を持ち始める契機

にもなったと思います。これまであまり指摘されてきませんでしたが、地方民放局が放送ジャーナリズムの発展に寄与した歴史はもっと評価されて良いのではないのでしょうか。芸術祭や放送文化基金賞などに地方局制作の優れたドキュメンタリーが出てくるのもその頃のことで、背景にはローカルワイドニュースの深化があったのだと思います。

——思い込みと言ったら語弊がありますが、伝統的にこうするものだというニュース、放送の作り方、表現の仕方、つまり、絵がなくて動画がないとダメだというのは固定観念ですよ。それを打ち破ってしまったということですね。

溝口 今ではよく使われる表現ですが、ニュースキャスターが「まず、この音をお聴きください」と言って始めるニュースなんて、その時代に初めて生まれた手法だと思います。

——非常に興味深いお話をありがとうございました。だいぶ時間が経ってしまいましたのでこの辺でひとまず終わりにしたいと思います。誠にありがとうございました。